

「クメール・ルージュ（KR）について」あるいは「KRが政権をとれた背景とは」

熊岡路矢／カンボジア市民フォーラム

カンボジアは、現在は東南アジアの小国であるが、アンコール文明を誇る、また陽光と水に恵まれた豊かな国であった。この国では、「飢え」はありえないと言われていた。また多くの人々は農業に従事する穏やかな民族性をもつ。この地で行われた「クメール・ルージュ＝赤いクメール」（以下KRと略称する。カンボジア共産党、ポル・ポト派とも呼ばれる。）の虐殺と粛清、また紛争の現代史（1970-1991）の流血は、その美しい風景を裏切り、人の理解を超える。

国連とカンボジア政府の協力により「クメール・ルージュ裁判」が行われる。またカンボジア現代紛争史における「鬼っ子」とも言えるKR生成および、「ベトナム戦争」など国際政治との関係について触れたい。問題意識としては、「カンボジア政治における少数派のKRがなぜ政権につくことができたのか？」 国内政治、国際政治の両面から見ていく。

A. [歴史的背景] 19世紀—第二次世界大戦後、独立まで

「フランス領インドシナ」は、19世紀半ば、フランスに植民地（正式には、1887年）とされたベトナム、カンボジア、ラオスの三カ国を指す。これらの国の人々の中で独立を目指す運動が始まった。複数の独立運動の中で、ホーチミンなどが設立に関わった「インドシナ共産党」（1930年10月設立）が後世にも影響を残した。ひろくカンボジア、ラオスの独立運動家も結集しながら、指導の中心はベトナム人活動家であった。第二次世界大戦中の、日本軍によるフランス軍武装解除などで、この三カ国の独立が果たされたかに見える瞬間もあったが、日本の敗戦（1945年8月15日）により、再びフランスが宗主国としてもどり、独立への戦いは振り出しにもどった。

第二次世界大戦後の、カンボジア独立運動は、A)「右」の（国粹主義的）民族主義の色が強いものと、B)「左」の共産主義運動系のものがあつた。①「左」の中では、ソ連の傘下に入りベトナムとの連携を軸とするものと、②「左」の民族主義的色彩の強いもの（反ベトナム色の強いもの）があつた。独立を目指す左派の中から、「カンボジア共産党」が生まれ、当初ベトナム独立運動とも連携していたが、ポル・ポト（最高指導者。本名：サロト・サル）とイエン・サリを中心とする執行部は、反米色のみならず、ソ連・ベトナムに敵対していく方針をとっていった。ポル・ポト、イエン・サリなどは、フランスでの留学中に国際共産主義運動に参加後帰国するが、1950年代の半ば、時のシハヌーク政権からの弾圧を契機に、農山村地域に逃れ解放区をつくる。タイ国境の北部山岳地帯、西部山岳地帯に拠点をつくつたとされている。

[カンボジア現代史・紛争への歴史。独立から、1970年3月クーデターまで]

カンボジア左派の花形、キュー・サンパン、フー・ニム、フー・ユオンは、上記二名と異なり、フランスでの留学中に経済分野などで博士号を取得し、帰国後、シハヌーク国家元首率いるサンクム政権において経済大臣などを歴任した左派「表」の顔である。知名度も高く人気もあつた。しかし1967年シハヌーク体制の弱体化とともに、政権が右傾化すると同時に、この三名も圧力を受けプノンペンから姿を消した。（公安警察に逮捕され、秘密裏に処刑された可能性も報じられたが、実際には解放区に逃れポル・ポトと合流していた。）

1960年代、ベトナムを中心に激しく戦われていた「ベトナム戦争」のカンボジアへの悪影響と被害は、ぎりぎりの「中立政策」を目指すシハヌークの外交努力により、限られていた。しかし1965年の米国との国交断絶以降、米国の圧力と親米派の勢力は増し、上記1967

年のシハヌーク政権の片翼化、さらに1970年3月には、米国の支持を受けたロン・ノル將軍による、シハヌーク追放クーデターとなる。ロン・ノル政権（1970年3月誕生）は右派民族主義者として、大きくは米国陣営で、解放勢力、左派勢力と戦うこととなった。

かたや追放されたシハヌークは、中国などの支持を取り付けつつ、国内的には宿敵とも言えるKRと組んだ。ポル・ポト派は1970年代前半の時点で、中国「文化革命」派の思想をとり入れた。ポト派幹部自身は知識人であるが、知識人批判、非識字者などによる徹底した社会変革、伝統的な宗教・文化・価値の否定などを進めた。さらに理想的社会の実現として、市場や学校制度、家族制度の否定まで踏み込んだ。「文化革命」派を上回る、破壊的な思想と制度を持ち込み、党外・党内の反対派を攻撃もしくは粛清していった。

B. [なぜ、KRに政権がとれたのか] 1975-1979年を中心として

- ・中国の強力な支援がKRを強めた。
- ・ロン・ノル政権のクーデターが、人気のあるシハヌークをKRと連携させた。
- ・米国の意図を超えて、激しい空爆の被害拡大が、KRへの追い風となった。
- ・米国支援のロンノル政権の、腐敗・汚職がKR支持を広げた。

政治的少数派であるKRがカンボジアにおいて、一定の野党的役割を果たすことはあっても、政権をとる可能性は本来限りなく小さかった。政権まで奪取し、文化革命派を上回る極端な政策を実施するには、いくつかの政治上の偶然が働いた。

国際情勢： 「冷戦」＝米ソ対決構造（～1991年）の中で、さらに世界は米ソ中対決の三極構造の複雑な紛争構造になっていた。その中で、ソ連、ベトナムの対抗者という意味でのKRを、中国（それも文革指導者の没落以後も）が支えた。同様な流れで、タイ軍部の一部も森林資源利権の共有もふくめ、KRと協力した。

国内情勢： 上記のクーデターは、人気のあるシハヌーク国家元首が、KRの看板として利用される流れにつながった。一部地域での支持基盤はあったものの、全国的な人気と支持を欠いていたKRが、全国的な政治プレーヤーとして活動する隠れ蓑となった。

前述の米国のカンボジア空爆は、解放区および周辺に行われ、KRやシハヌーク王党派ゲリラ以上に、一般農民、女性や子どもの犠牲者をもたらした。カンボジア国民における、反米機運と、米国が支えるロン・ノル政権への批判的感情の広がりという結果をもたらした。激しい空爆は、近年のイラク戦争でも起きた、「誤爆」（味方陣営への爆撃、あるいは非軍事目標の被害など）を引き起こし、弱いロン・ノル支持の基盤をさらに弱めた。

これらの状況は1970年以降の内戦において、KRへの追い風となり、農山村地域から首都プノンペンを包囲する形で支配地域を伸ばしていった。経済・軍事援助の私物化をふくめ、ロン・ノル政権の腐敗体質も支持を減らし、また解放区からの国内避難民のプノンペンへの集中も（プノンペンの適正人口は概ね百万人前後であるが、政権末期のプノンペン人口は、二百万人以上であった。）、人々の生活上・経済面での苦しさを増加した。

ベトナムでは、1975年4月30日、南ベトナム大統領府に北ベトナム軍戦車が入り、勝敗が決まり戦争が終結した。カンボジアでは、さらに一足早く、4月17日、KR軍がプノンペンに入城し、ロン・ノル共和国政府は崩壊した。その後に起きた、強制大量疎開、強制労働、粛清など、「カンボジアの悲劇と地獄」は、映画「キリング・フィールド」ほか、報道、文学、ドキュメンタリーで描かれ周知された事実として、ここでは誌面をとらない。KR支配下のわずか3年8ヶ月で、総人口700万人のうち170万人もの人命が失われたという異常さを記すに留めたい。

〔KR政権転覆以降—和平協定まで〕 1979-1991

KRは政権から陥落し、ゲリラ勢力となった。隣国の政権を倒した、ベトナムに対して国連憲章（それぞれの国の主権を尊重すべき）違反ということで、国際的な批判が集中した。しかし、KRが政権掌握時期に行った、粛清、虐殺の事実が明らかになるにつれて、KR批判、KRへの支持撤回が相次いだ。それでも、米国と中国を中心に、反ソ連・反ベトナム政策は維持され、その結果、水と油の三派のゲリラ（①KR、②シハヌーク王党派、③ソンサン共和派）を束ねることで、KRをふくむ反ベトナム勢力への直接軍事支援、間接支援（避難民救援の一部も入る）は続けられた。

この間の内戦状況の継続により、地雷被害をふくめ、カンボジアの人々の流血は続き、70年代ほどではないが、多くの人命が失われた。ソ連・東欧圏の衰退とともに、冷戦構造が弱まる中で、これ以上の被害はもううんざりだとする、カンボジアの人々やNGOの声に押され、平和を目指す協議がシハヌーク国家元首（亡命政権側）—フンセン首相（プノンペン政府側）間などで続けられた。ASEAN諸国内で、比較的ベトナム側に理解にあったインドネシアがイニシャチブを発揮し和平会議を開いたり、また強硬派と言われていたタイ政府にチャチャイ政権が誕生し「インドシナを戦場から市場へ」転換しようという方針を打ち出したり、国際環境も変化していった。

〔和平協定以降—〕

一旦はサインしたカンボジア和平協議から、KRは降りて再び総選挙（1993年5月）妨害などのゲリラ活動に復帰した。この時点では、冷戦構造の崩壊が明確になる中、中国もタイもKR支援から大きく手を引いた。KRは国内的国際的に孤立し、組織内の争いも増えていった。1996年には「ナンバー2」と言われるイエン・サリ（兵士の数で約4000名。）がKRを離脱し、カンボジア王国政府に投降した。1997年には、対KR政策をめぐり、王国政府の第二首相フンセンが、第一首相ラナリットを放逐した。

1998年内輪もめ状態（国防大臣のソン・セン一家虐殺など）の中、ポル・ポトの「病死」、もっとも恐れられたタカ派のタモック（2006年8月拘束中に病死）の逮捕、キュー・サンパンやヌオン・チアなど最高幹部の投降などで、KRほぼ完全に無力化した。生き残りの多くは、イエン・サリ同様、カンボジア西部パイリン市などを拠点に暮らしている。

KRによる政権掌握以後、30年以上が経過して、ようやく「クメール・ルージュ裁判」が行われようとしている。高齢化した幹部は、殺されたりあるいは病死している。被告にあたる指導者で、裁判を全うできる人の数は少ない。厳しい判決が下れば、またある種の内戦状態になることを心配する声もある。判決が甘すぎれば、なぜ裁判まで行ったのかという批判もあるだろう。KRを支援してきた諸外国の中には、様々な秘密が明るみに出ることを好まない国もある。現在のカンボジア政府幹部の何割かは、もとKR中堅幹部であり、裁判の行方に気を揉んでいる。KR裁判は、明確な結論を出せないかも知れない。

カンボジア国民の多くは、なぜ、どのような背景で、自分たちの家族が殺され、あるいは自分たちも拷問を受け苦しめられたのか、知りたがっている。それが分かって、家族が帰るわけでもないという空しさは残るが、大きな政治力をもったKRを歴史の中で理解したい、そして、同じ誤りを繰り返させない政治・社会・経済を創り出したいと悩んでいる。

「170万人ものカンボジア国民を殺したKRは悪いやつらだ」という結論はわかりやすい。しかしKRは、真空状態やカンボジア国内の事情だけではなく、まさに70年代以降の国際政治状況の中で生まれ、過分に強力にされた政治党派である。「罰されるべき人間と罪が罰される」こと、そしてKR裁判あるいは関連する調査・分析が、これら背景まで明らかにしてくれるよう、犠牲者と家族は望んでいると思う。